龍球の軌跡

みやーびんぐ

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

超一星龍と激闘して勝利した悟空は神龍（シェンロン）とともに天の上に消えて行ってしまう。

時が経ち異世界に移動して　トールズ士官学校旧校舎の地下に行くことになる…。

※

始めまして、みやーびんぐと言います。

初めて小説を書いてみました。頑張って書いていこうと思いますので。
ご感想、ご指摘があればよろしくお願いします！

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 13
第4話 …… 19
第5話 …… 28
第6話 …… 41
第7話 …… 48
第8話 …… 59
第9話 …… 71

第1話

とある地下。
薄青色の胴着を着た少年は眠っていた。
しばらく時間が経つと少年は眠りから覚めて

「ここは、どこだ?」

と言い、前に進んでいった。

前に進んでいくと、

制服を着た男女9人が武器を持って羽が生えていて牙が鋭いドラゴンみたいな魔物と戦っていた。
制服を着た男女9人は日本刀、剣、ショットガン、杖、弓など色んな武器を使っていた。

それに加え、魔法らしきものを使っている姿あった。
少年は制服を着た男女９人が戦っている姿を見て
「あいつら、中々やるなぁ。」
独り言を言い、しばらく経つと制服を着た男女９人は魔物を倒した。
「よし、倒したか。」
「ああ、これで一安心のようだ。」
魔物を倒したのか制服を着た男女９人は安堵な溜息をはいてた。
するとその時
「中々、良い勝負だったぞ！」
子供のような高い声が▪ＶＩＩ組全員の後ろから聞こえた。
「そなたは誰だ？」
青色ポニーテールの女の子が聞いて
「オラは、孫悟空!!」
少年は名前を答えた。
「孫…悟空…？」
「珍しい、名前ですね。」
「君はどこから来たのだ？」

黒髪の青年が少年に質問したら、
「分かんねぇ。さっきまでは神龍といたんだけどなぁ。」
「分からないって…。」
「シェン…ロン？」
分からないってどういうことだ？とＶＩＩ組全員は頭の上にハテナを浮かんでいた。
眼鏡を掛けている三つ編みの女の子が小声で
「迷子ですかね…？」
「旧校舎の地下に迷子なんかいないでしょ。」
小声で金髪ツインテールの女の子が眼鏡を掛けた女の子に答えた。
すると少年は
「そういや、オメェらの名前は？」
少年がＶＩＩ組全員に聞いて
「俺はリィン・シュバルツァーだ。」
「私はアリサ・Ｒよ」
「僕はエリオット・クレイグ」
「私はラウラ・Ｓ・アルゼイド」
「僕はマキアス・レーグニッツ」

「俺はユーシス・アルバレア」
「私はエマ・ミルスティン」
「…フィー・クラウゼル」
「俺はガイウス・ウォーゼル」
全員自分の名前を悟空に言った
「リィンにアリサにエリオットにラウラにマキアスにユーシスにエマにフィーにガイウスか!!よろしく頼むな!!」
悟空は笑顔で答えたら、
「よろしくね。悟空君。」
そこに割り込んできたのは、新しい女性の人で
髪色は赤で大人って感じの女性が入ってきた。
「あたしは、サラ・バレスタインよ。彼らの教官をやってるわ。
まさか、旧校舎の地下に悟空君みたいな子供がいるとは思わなかったわ。
これでオリエンテーリングは終了よ。
とりあえず、彼らに伝えることがあるからその後でいいよね？悟空君？」
サラ教官は相手は子供だから優しく答えたら
「オラは子供じゃねえぞ。オメェらよりか年上だぞ？

ドラゴンボールの所為でオラは子供になっちまっただけだからなぁ。」

悟空は普通に答えたら

「「「「「「は？」」」」」」

全員一致でこう答えた

第2話

「ちょっとまて!!　僕達よりか年上って君はいくつなんだい?!」

マキアスが悟空に聞いたら

「オラか?　オラの年齢は○○○歳だぞ!」
「…○○○歳?」
「ありえない…。」
「嘘でしょ…」
「…。」
悟空以外全員は唖然としていた。
それはそうだ。こんな子供みたいな子が○○○歳って3桁超えてるってどういうことだ?
皆ビックリするに決まってる。
しかし、全員は悟空が言ったこと嘘には聞こえなかった。

するとエマは
「そういえば、ドラゴンボールって何ですか?」
悟空に聞いたら
「ドラゴンボールは7つ揃えると神龍が来て願いを3つ叶えられるんだ。」
「それは、凄いな…。」
「願いを3つ叶えられるって…」
ＶＩＩ組全員ドラゴンボールに興味を湧いていたら
「でも、色々とあってよぉ。神龍に乗って寝てたらここに来てたんだ。」

「何か凄いな…悟空は。」
リィンが答えたら
「あんた達は今から伝えることがあるから、悟空と喋るのは後ね。
悟空は後で学院長と話しがあるからちょっと待っててね」
サラが悟空に言ったら
「わかった!!」
悟空が元気よくサラに返事をしてくれた。

あれからしばらく経つと、悟空とサラはトールズ士官学院内に歩いてた、学校内では勿論学生がいて学生全員は悟空の方見ている。
学校内に子供が歩くのは凄く珍しいことなんだろう。
サラはトールズ士官学校について、リィンのクラスは他のクラスと変わったクラスだと悟空に説明してくれた。
半分も理解してくれたか分からないけど、とりあえず説明してあげた。
喋っている内にサラが扉の前に立ち止まってノックを軽くして
「学院長、失礼します」
「うむ、入ってくれ」
中から声が聞こえて扉を開けた
中を開けたら７０～８０代ぐらいの筋肉がガッチリした体をもつ老人が座っていた。

「学院長、先程連絡した少年を連れてきました。」
「ご苦労様。」
　学院長がサラにそう言い。
　その後、悟空に向かって
「初めましてじゃの。わしはこのトールズ士官学院の学院長をやっているヴァンダイク学院長じゃ。」

「オッス。オラは孫悟空！」
「孫…悟空君か…聞いた通り変わった名前じゃのう…。」
「よろしくな！ヴァンダイク!!」
　悟空が学院長に言ったら
「こら、学院長に呼び捨ては駄目でしょう！」
　サラに注意されて
「はっはっはっ。いいんじゃよ。呼び捨てで構わん。
　それな悟空君はわしより年上らしいからな。」
　笑いながら学院長がサラに答えた。
「そういえば、悟空君よ。これからどうするつもりなんじゃ？」

学院長が悟空に聞いてみた
すると
「うーん。色んな所で行ってみてぇな。」
「そうか…。色んな所に行けるか分からないが良かったらこのトールズ士官学院に入学してみないか?」
学院長が悟空に聞いて悟空は
「オラ、学校通ったことけど大丈夫なのかぁ?」
「まぁ大丈夫じゃろ…。少なくとも今悟空君は住む場所がないんじゃろ?うちは寮もあるから住む場所もあるし良かったら入学してみないか?」
「おぉ!! 学校通ったことないから。通ってみたかったんだよなぁ!!オラは入学してみるわぁ!」

「そうか!それは良かった!!
そういうと思ってもう手続きはしてあるからもう明日から通っても大丈夫じゃ。」
この時サラは凄い準備早いなと思っていた。
最初から悟空は入学するの分かっているような感じだった。
「そうかぁ。 そういえばヴァンダイク。」

「なんじゃ？」

「ここに強い奴おるかぁ？」

「ああ…強い奴おるよ」

「そうか！そいつは楽しみだ!!ヴァンダイクとサラ　!!今度オラと勝負しねぇか？」

悟空がヴァンダイク学院長とサラに向かって言った。

ヴァンダイク学院長とサラは

「いいわよ。」

「いいじゃろう。」

「サンキューな!!　」

「じゃ今から第三学生寮で行ってもらうから、そこは今日から悟空が泊まる場所じゃ。」

「おう！」

「明日から入学だから学院に行ってもらうのだが、
クラスはじゃな…

特化クラス《ＶＩＩ組》じゃ!!」

第3話

第三学生寮…

サラ教官から突然に連絡が来て、伝えることがあるから全員第三学生寮のエントランスに集合をかけられた。
「サラ教官どうしたんだ…？　急に呼び出して。」
「急に連絡きて理由をきたらすぐに切られちゃったしね」
リィンの言葉にエリオットの心配そうな顔で頷く。
すると…
「おまたせ―！」
扉を開けたサラがにこやかに入ってきた。
「皆に伝えることがあってね。なんと…急にですが、
特科《ＶＩＩ組》に転入生が入ることになりました!!」
と盛り上がっているのはサラだけで他の人はビックリしたのかぽかんと口を開けていた。

「え？転入生？」
「それらいきなりですね…。」
「さっき決まったばかりでね。もう正式に手続きしてるし、今日からこの第三学生寮に泊まることになったから
よろしく頼んでほしいのよ。」
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!!!」
サラが話している間にマキアスが入ってきて…
「転入生って急すぎませんか!?　それに転入生って一体誰なのですか!?」
マキアスがサラに聞いたら
「それは、みんな会っている子よ。」
「会っている者だと…？」
ラウラが呟いた瞬間にリィンが感じたのか。
「もしかして…」
「ふふ。リィンは分かったようね。入ってきなさい。」
サラの言葉と共に扉が開いて、そこには薄青色の道着を着た少年が入ってきた。
「オッス!!オラ孫悟空!!　これからもよろしくな!!」
孫悟空が皆の前で元気よく挨拶をした。

「やっぱり、悟空か…。」
「おう!!リイン、これからもよろしくな!」
「あぁ。これからもよろしくな。悟空。」

リインと悟空がお互いに握手をした。
「悟空はね。見ての通りフィーより子供だから飛び級って形にさせてもらったわ。」
とサラが皆に言ったら。
「飛び級にも無理があるでしょう!!　悟空の見た目的には１２歳ぐらいなんですよ!!」
マキアスがサラにツッコミを入れたが
「まぁ大丈夫でしょ！　学院長もＯＫしてくれた訳だし。
悟空にはあとで特科《ＶＩＩ組》の制服を渡すから、明日から制服で登校しなさい。」
「おう!!分かった!!　サラ!色々サンキューな!」
「どういたしまして。…あっ。」

サラが突然何かを思い出して
「そういえば、悟空の武器も選ばなきゃいけないわね。
トールズ士官学院の生徒はほとんどの人は武器を持っているわ。　明日辺りに武器を選びにいこうと思っているんだけど、どうかしら？」

サラが悟空に聞いたら

「武器かぁ？　オラは武器いらねぇよ？素手で十分だぁ。」
「素手って、いくらなんでも…無理があるでしょ！」
「ああ…ましては悟空みたいな小さな体では無理があるだろう。」
アリサとラウラがそう言ったが
「じゃぁ。ちょっと試してみっかぁ。」
「え？」
「試すって何を？」

リィンが悟空に聞くが
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

「「「「!?」」」」
突然悟空の周りに力の波動が集まってきて…
「はぁっ!!」
悟空の体の周りには力の波動が纏まっていた。
他のメンバーはその姿を見てびっくりしていた。
「なんだ…そなたの力は…。」
「なんて、力なんだ…。」
「子供がある力じゃないぞ…」
「言っとくけど、オラ全然力だしてないぞ。」

「「「「え?」」」」

ＶＩＩ組＋サラは驚いていた。それはそうだ。力の波動纏まっている状態の悟空を

みてもう既にここにいるメンバーは悟空に勝てないと確信したのだから。
それを悟空は全然本気を出してないって一体どれほどの力の持ち主だろうが。
そう考えている内に悟空の周り力の波動が消えていった。おそらく元に戻ったんだろうと全員は確信した。
そしたらリィンが
「そういえば、気になっていたのだけど…

悟空ってなんで尻尾生えているの?」
リィンが悟空に聞いて
「今更すぎるだろ!」
マキアスがツッコミを入れていた。

第４話

次の日の朝・・・。

トールズ士官学院特科《Ⅶ組》全員が第三学生寮で朝食をとっていたが

朝から大変なことになっていた・・・。

「ガツじゅるじゅるじゅるガツじゅるじゅるじゅるじゅるりガツガツガツガツ・・・」

「「「「「「・・・・・・・・・。」」」」」」」

「ガツじゅるじゅるりガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツ・・・・・・・。

んひゅ～！　もぐもぐもぐもぐうめぇもぐもぐもぐもぐもぐ・・・

　ガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツじゅるじゅるじゅるりガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツ。」

「そなたは・・・まだ食べる気か・・・？」

ラウラが呆れた状態で悟空に聞いてきた。

他のメンバーも驚きや呆れた状態の人が何人かいる。

それはそうだ。　孫悟空は一人で１０人分以上のご飯を食べているのだから。

「・・・・・ごっくん。」

「「「「ちゃんと、噛めよ。」」」」

皆が悟空にツッコミを入れた。

「いやわりーわりー。オラこんなうめぇもん久しぶりに食ったからさ。ついつい。」
「だからっていくらなんでも食べ過ぎだろ・・・。」
　リィンがちょっと引いた様子で悟空に言ったら。
「オラ、まだ半分満腹しかなったくれぇだぞ!!」
「あれで、半分って・・・。」
「君の胃袋は一体どうなっているんだい?」
　マキアスが悟空の胃袋に対して疑問を抱いた。
「しかし、今日から学院かぁ・・。オラ、学院初めてだなぁ。」
「え?初めてなの?　今まで何をしていたの?」
　アリサが悟空に質問した
「ん?オラか?　オラはずっと修行しかしてねぇぞ?」
「修行って・・・」
「あ。もうそろそろ学院にいく時間だ。着替えてくれないか?悟空」
「おう!わかった!!」
　リィンが悟空に言って悟空は、部屋に入った。どうやら学院の制服に着替え始めたらしい。本人は制服を着るの初めてだと言っていたが制服を初めて着るって一体悟空はどんな人生に歩んできたのか。リィンは気になっていた。

すると

「リィン！おまたせ!!」

声が聞こえたのが制服を来た悟空であった。

「着替えたか。そろそろ学院にいくか。」

「おう!!」

リィンと悟空はそのまま学院に向かった。

キーンコーンカーンコーン

「――――皆さんもご存知のようにかつてエレボニア帝国は存亡の危機に瀕してました。」

今授業を担当しているこのメガネの教官はトマス教官といい。歴史学を担当している教官だ。とても優しくて授業も分かりやすいし良い教官だと思う。

「その危機とは、２５０年前の《獅子戦役》、時の皇帝亡き後、帝位を巡り、有力な帝位継承者たちが数年に渡って繰り広げた内戦です。

まあ、帝国に住んでいる人なら子供でも知っている逸話ですよね・・・。
孫悟空くん・・・？」

「ｚｚｚｚｚｚｚ」
悟空は授業中なのに寝ていた。
「こら、悟空起きろ。授業中だぞ。」
リィンが悟空の肩を叩いて起こそうとしても・・・

「ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ」

「ダメだね。これは。」
エリオットが困った顔でリィンに言った。

その後サラ教官に寝ていることバレて悟空は怒られたそうだ・・・。

キーンコーンカーンコーン

「お疲れ様。今日の授業も人通り終わりね♡」

サラ教官がそう言ってきて

「それと、来週は《実技テスト》があるから。」

と言った途端みんなは気になり出して・・・

「《実技テスト》・・・」

「それは一体どういう・・？」
アリサが気になったので質問してみた。

「ま、ちょっとした戦闘訓練の一環ところね。
一応、評価対象のテストだから体調管理とかは気をつけなさい。
なまらない程度に体を鍛えておくのもいいかもね。」

「フン・・・面白い」
「うわぁ・・・なんかいやな予感するな・・・」
「戦えるなんて。オラ、ワクワクしてきたぞぉ。」
そしてまだサラ教官の口が止まらず
「そして、その《実技テスト》の後なんだけど、改めて《Ⅶ組》ならではの重要なカリキュラムを説明するわ。そうゆうことなのでＨＲこれで終わりにするわ。」

ＨＲが終わって悟空は
「さて、帰るかぁ」
と帰ろうとした悟空だったがサラ教官に止められ。

「こら、あんたさっきの授業寝ていたからリィンの手伝いをしなさい。」
「ま、暇だしいっか。」
といいリィンの手伝いをすることになった。

第5話

あれから一週間後

トールズ士官学院　グラウンドで《Ⅶ組》全員とサラ教官が集合していた。

「それじゃあ。予告通りに《実技テスト》を始めるわよ。

皆、準備はいいかしら？」

「「「はい！」」」

「それじゃあ。最初にリィン、エリオット、ガイウス前に出なさい。」

「はい！」

「いきなりか・・・。」

「承知。」

三人は返事をした。

作戦はリィンとガイウスは前衛で攻めで、エリオットはアーツの補助するという形式になっている。ｌｉｎｋの方は前衛の方ですることになっている。

「それじゃあ、とっとと呼ぶとしますか。」

サラが言った後に指を鳴らしたら、謎の傀儡が出てきた。

「これは・・!?」
「魔獣!?」
「いや・・・命の息吹を感じない。」
「ええ。そいつは作り物の〝動くカカシ〟みたいなもんよ。
そこそこ強めの設定はしてるけど、決して勝てない相手じゃないわ。

たとえば、ＡＲＣＵＳの戦術リンクを活用すればね。」
サラが答えたら三人は反応して
「あ・・・」
「それが狙いですか・・・!」
「そうよ・・・。それじゃ始め。」
実技テストが始まり、
「リィン、俺から行くぞ!!」
「わかった。ガイウス」
ガイウスは槍の技であるゲイルスティングを使用し、傀儡に当て
「崩したぞ!!」
「ああ」

リィンが崩した傀儡に追撃をして急所付近に斬った。
そのあとにエリオットが・・・。
「僕も支援するよ!!」
エリオットがエコーズビートを使用し、全員に防御の結界を貼った。
「「ありがとう」」
「リィン、来るよ!」
「ここか!」
リィンは傀儡の攻撃を刀で防御をし、ダメージを軽減させる。それにこの傀儡、とんでもない攻撃力のため、真面に喰らったら間違いなく戦闘不能だ。
「そこだ・・・!」
リィンは八葉一刀流の初伝の技、紅葉切りをを使用したら、傀儡が崩れて
「崩れたぞ!」
「そこだ!!」
ガイウスも傀儡に急所に狙って、エリオットは
「エアストライク!」
エリオットのアーツで、傀儡にダメージを与えられて
「よし、これで決めるぞ!!」

ガイウスが傀儡に渾身の突きをし、そして傀儡の動きが停止した。
「よし。」
「なんとか勝てたね！」
「ああ、強かったがみんなのおかげだろう。」
そのあとにサラがパチパチと拍手してる姿を見て
「うんうん、悪くなかったね。戦術リンクも使えたし、旧校舎地下ではの実践が効いていんじゃないの？」
「はは・・・そうかもしれません。」
リィンが答えたら三人以外のメンバーは
「ほう・・・。」
「いつの間に、そんな対策を・・・。
「オラも早くやってみてぇよ。」
「それじゃあ。次は　ラウラ、エマ、ユーシス前に出なさい!!」

「なかなか、強かったな。」
「そうだな。まだ余裕に見えるが？」
「そうでもない・・・。」
「はぁはぁ　ラウラさんは強かったですね・・・。」
「エマ、大丈夫か？」
「はい。平気です。」
「なかなか良かったわね。次は、アリサ、フィー、マキアス前に出なさい。」
　最後の組なのに何故か悟空の名前が呼ばれなかったので悟空が
「あれ？オラは？」
　サラに聞いたら

「悟空。あんたは一人でやりなさい。」
「ん？オラ一人でか？」
「そうよ。」
「うん。わかった。」

悟空が返事をし、しばらく待つとアリサ達が終わって苦戦をしていたようだが、なんとか合格できたようだった。最後に悟空の番で・・・。
「悟空さん・・。一人で大丈夫でしょうか・・・。」
エマが心配していて
「この前のオーラはすごかったが・・・さすがに心配だな。」
ラウラもちょっと心配をしていた。
やはり悟空が見た目が子供のため、全員は心配しているのだろう。
「悟空。準備はいい？」
サラが悟空に聞いて
「おう!!オラはいつでもいいぞ!!」
と答えて傀儡に対して構え始める。
「それじゃあ・・・始め!!」

サラが始めって言った瞬間・・・。

悟空が一瞬消えた

いつの間にか傀儡の後ろに悟空がいて空に向けて傀儡を蹴っ飛ばして傀儡が空に吹っ飛んでいた。

その後にいつの間にか空の上に悟空がいて

空に吹っ飛んでいる傀儡に対して悟空は

「そりゃぁぁぁ!」

地面に向けて叩きつけて

傀儡は地面にぶつかって動きが停止した。

その姿をみた全員は・・・。

「どうやって・・・急に傀儡の後ろに移動したり、急に空の上に移動したのだ・・・?」

マキアスが目がパッチリと開きながら驚いていて

「あれ・・・どうなっているんだ?」

「あやつは本当に何者だろうか・・・。」

「・・・・ありえない。」

「なによ・・・あれ・・」

「あたしですら・・・何が起きたのか分からなかったわ。」
サラを含め全員驚いていた。
それはそうだ。始めと言った瞬間に悟空が一瞬で傀儡の後ろ、空の上に移動していたからだ。一瞬で移動するなど人間では無理に等しい。
それにあの傀儡なかなか強かったのに、悟空は一分・・・いや三十秒すらかかってない状態で倒してしまったのだ。それは驚くに決まっている。
「あれぇ～?.軽くやったぐれぇなのにもう終わっちまった。」
悟空がそう言って、全員は「は?」って顔になっていた。
「あれで軽くって・・・」
「・・・・人間超えているね。」
エリオットとフィーが言ったらリィンが
「悟空・・・。今の技どうやったんだ・・・?」
リィンが悟空に聞いたら。
「ん?　今のはぁただ移動して攻撃をしたんだ。」
「ただの移動・・・?!」
「移動したの見えなかったぞ…。」
「・・・・ますますありえない。」

悟空以外は全員驚いてばっかりだった。
サラは驚いてばかりのせいか忘れていたことを思い出し口を出す。
「さて・・・驚きすぎて一瞬フリーズ状態になっていたけど
実技テストはここまでよ。先日に話した通り、ここからは重要な伝達事項があるわ。
君たち《Ⅶ組》ならではの特別カリキュラムに関してね。」
それを聞いた《Ⅶ組》全員は気になってサラの方に顔を向けた。
「さすがに、皆気になっていたようね。
君たちに課せられた特別なカリキュラム・・・・

それはズバリ《特別実習》よ!!」

《Ⅶ組》全員は頭の上に?がついていて
「と、特別実習ですか・・?」
「な・・なんだか、嫌な予感しかしないんだが。」
「君たちにはA班、B班に分かれて指定した実習先に行ってもらうわ。そこで期間中、用意された課題をやってもらうことになる。まさに特別な実習なわけね♪」

「なかなか、面白そうじゃねえか。」
悟空が能天気に言ったら
「バレスタイン教官。結局俺たちに何時どこへ行けと言うんだ？」
ユーシスがサラに聞いたら
「さっきも言ったどおりにA班、B班を分かれてもらうわ。
さあ一部ずつ受け取りなさい。」
サラが全員に紙を渡してきた。
そこには
【4月特別実習】
A班：リィン、アリサ、ラウラ、エリオット、悟空
（実習地：交易地ケルディック）
B班：エマ、マキアス、ユーシス、フィー、ガイウス
（実習地：紡績町パルム）

と書かれていて。

「おっ。リィンとアリサとラウラとエリオットと一緒か。よろしくなぁ」
悟空が言い出して
「ああ・・よろしくな。悟空」
「よろしく。」
「よろしく頼むぞ。悟空」
「よろしくね。」
四人とも悟空に挨拶をした。
B班の方はユーシスとマキアスが喧嘩をしてるようだった。
「日時は今週末、期間は二日くらいになるわ。
A班、B班共に鉄道を使って実習地まで行くことになるわね。
各自それまでに準備を整えて英気を養っておきなさい！」
とサラが言った。その時。
ぐぅ～ぐるるるるぅ……。
「ハハハ。オラ腹が減っちまったぁ。」
腹の音がなったのは悟空だった。

「ははは・・・。悟空飯でも行くにいくか。」
リィンが誘って
そのあとにラウラが
「悟空・・・。」
「ん？なんだ？ラウラ？」
悟空が返事返したら。
「後でそなたと手合わせをしたいのだがもしよければどうだ？」
ラウラが言ったことを聞こえていた全員はびっくりしていた。悟空は
「勝負か？いいぞ。」
「じゃあ後で私から話しかける。」
「おけー！じゃあまた後でな！」
と言い悟空とリィンは飯を食いに行った。

その後リィンの財布の中身が消えてリィンは泣いていたようだった。

第6話

夕方・・・。
トールズ士官学院　グラウンドでラウラと悟空二人だけがいた。
先ほど、ラウラが悟空に決闘を申し込んでいて悟空が飯を食った後
ラウラが悟空に声を掛けて今グラウンドにいる。
ラウラと悟空は対面して見つめ合いながら話していた。
「すまないな。私の都合に付き合ってもらって。」
「いいってよ。オラは全然大丈夫だぁ。暇だったしな。」
悟空が言ってラウラが苦笑した。
「そうか。ではそろそろ始めようか。」
と言いラウラは剣を構え始めた。
同じく悟空も構え始めて
「そなたには、かなわないが私は全力でそなたにぶつけていくつもりだ。」
「ああ。かかってこい。」
「では、いくとする。」

言った瞬間ラウラが先に悟空に向けて攻撃をした。
しかし目の前に悟空は消えていた。
するとラウラの後ろの方に悟空が立っていた。
「どうしたぁ?オラこっちにいるぞ?」
「いつの間に・・・」
もう一度ラウラが悟空に接近して
「はぁぁぁぁぁぁぁ!」
今度はラウラの技、鉄砕刃を使った。
しかし・・・。
「よっと。」
ガシッ!
「なっ・・・!」
なんと悟空はラウラの剣を片手で掴んでいた。
ラウラ自身でも結構自身がある技であり、まさか片手で掴まれるとは思わなかった。

確かに悟空は実力はすごいと思うがまさかここまでとは・・・。
「今度は、オラからいくぞ!・。」
と言い悟空はラウラに向けてパンチをした幸いラウラは剣でガードをしていたが力が強すぎてガードしていても吹っ飛んでしまった。
そして壁にぶつかって・・。
「ぐっ・・・・強い!」
このまま私は何もできずに負けるのか・・・。
それだけは絶対にいやだ!!
ラウラはそう思っていた。
結構ダメージはもらったがなんとかラウラは立ち上がって。
「はあああああああ!!」
今度は、地裂斬という技使った。
地を裂いて悟空の足場を奪って、その隙に攻撃をしようと考えていた。
しかし悟空は上に高く飛んだ。
そして一気にラウラの目の前に来て
「ぐっ・・・・」
ラウラの腹にパンチをした。

そしてラウラは地面に膝をつき倒れてしまった。
「まいった・・・・。悟空の勝利だ・・・。」
「ラウラ・・・。オメェはもっと強くなれる!!」
「ああ・・・。私はもっと強くなってみせるよ・・・。」
そして悟空はラウラに手を向けて
気をラウラに送っていた。
「これは・・・?」
「オラの気をラウラに分けているんだぁ。オメェ結構くらっているからなぁ」
といい。
「気か・・・。だんだん力が出てくる・・・。ありがとう・・・。悟空。」
「いいって。そうだ!! これからオラと散歩しないか?」
「え・・・・? まあ大丈夫だが・・・。」
いつの間にかすっかり夜になっていていた。
今思うと夜空は綺麗だなと思う。
そして悟空は急に・・・。
「よっと!」
「え・・・・・?」

ラウラをお姫様だっこして。
「それじゃぁ。いくか」
悟空が言った瞬間・・・
悟空が宙に浮き始めた
そして移動し始めて、トリスタに出て色んな場所に飛んでいった。
「え・・・・・?空を飛んでいる?」
「ああ。これは舞空術を使っているんだ」
「舞空術・・・・。はは・・。信じられなくて夢でも見てるみたいだ。」
実際人が飛ぶっていうのはあり得ない話であった。
人が飛ぶって話は聞いたことない。
本当に夢を見ている気分であった。
「オラの仲間は舞空術使えてたぞ。」
「そうなのか。すごい仲間だな・・・・。

それと悟空・・・・。」

「ん?どうした?ラウラ?」

「そのお姫様・・・だっこ・・・・恥ずかしいのだが・・・／／／」
ラウラが照れた状態で悟空に言ったら。
「オラは気にしてないから大丈夫だぁ。」
(私は気にするのだが・・・)
「そういえば・・・悟空の仲間は今はどうしているのだ?」
ラウラが聞いたら
「オラも分からねぇ。でもココにはいないだろうなぁ。」
「そうか・・・・会えると良いな・・・。仲間に・・。」
ラウラが自然と悲しい顔になっていた。
それに気づいた悟空は
「はは・・。そんな悲しい顔するなぁ。大丈夫だぁ。オラの仲間全員つえぇ・・。
確かに会いたいが・・・大丈夫だぁ!!」
大丈夫そうな顔してラウラに親指立てた。
「そうか・・・。」
「ああ・・・。そろそろ帰るかぁ。」

「そうだな。今日は本当にありがとう。」
「なに、気にするな!!」
「ああ・・。今度は特別実習あるから頑張ろう。」
「おう!!」
と言って空を飛んでいる状態でトリスタに戻っていった。

第7話

日にちが過ぎて、ついに特別実習日となった。
だが第三学生寮一室、悟空の部屋の前になぜか、リイン、ラウラ、アリサ、エリオットが集まっていた。
理由は簡単、悟空が集合時間にいつまでたっても来ないからである。
おそらく、悟空は寝てるだろうと予想しA班の四人は悟空の部屋の前にいるのである。
「悟空!!早く来ないと列車が遅れちゃうよ〜!!」
「ラウラ、ドアを壊して開けてもらえないかしら?」
「承知した。」
ラウラは剣を持ち、ドアに一振りして見事ドアは壊れた。
すると、やはりベットの上には悟空は気持ちよさそうに寝ていた。
「ＺＺＺＺＺＺＺＺＺ」
「悟空!!起きろ!!」

リィンが悟空に揺さぶりながら言っても起きない。
そこでラウラが剣を持ち始めて悟空に向けて…
「悟空…。起きろ!!」
思い切り剣を振った。
ーーーーーーーーーーーー
列車の中。

「いってぇ～。全くひでぇ起こし方するなぁ。」

悟空がリィン達に言って

「そなたが起きないのが悪いのだ。」

ラウラが呆れていた状態で答えて

「しかし、悟空って凄いよね。ラウラの攻撃くらって無傷だなんて…。」

「いや、凄いってレベルじゃないぞ。エリオット。」

もはや人外を越えてるレベル。

「まぁ、オラは鍛えているからなぁ。」

「それで済むの悟空ぐらいしかいないわよ…」

「まぁ、列車に間に合って良かったよ。」

何とかギリギリ間に合った悟空達はそれから列車の中でブレードという対戦ゲームをやっていた。
だが、悟空は見事にボロ負けをしていた…。

ーーーーーーーー

トリスタから列車に乗って数十分が経つとA班は実習地に指定された交易町ケルディックへと到着していた。
そして何故だが知らないけどA班にサラ教官がきてついてきた。
「ここがケルディックかぁ…。」

「のんびりした雰囲気だけど、結構人通りが多いんだな。」
「あちらの方にある大市目当ての客だろう。外国から商人が多いと聞く」
「なるほど、帝都と違った客層が訪れているのね。」
「へぇ～食いもんいっぱいあるじゃねえか。」
「悟空。食べるのは良いけど少しは我慢しなさいよね。」
　アリサが悟空に言うとサラが
「ちなみにここの特注品はライ麦を使った地ビールよ。
　君たち学生だからまだ飲んじゃダメだけどね～。」
「いや…勝ち誇られても…
「全然、悔しくなんか思いません…」
　リィンとアリサは苦笑いの状態で返事をした。
「さてと、そろそろ今日紹介する宿に案内するわね」

「はい！」
「お願いしますー！」

と言いサラ教官が先頭になって歩き始めて宿に案内することになった。

ーーーーーーーー

「紫電の君…まさかこんな所にお目にかかることが出来るようとは」

建物の影から全身白い服を着た男が立っていて、その視線はずっとリィン達の方を見ていた。

そしてリィン達を見ていた白い服を着た男は何かを気がついてニヤリとした。
「それにしても…興味深い雛鳥達を連れているかと思えば、成る程、例のあの人が言ってた…尻尾を生えた少年…いや…あの男が《孫悟空》か…。」

男は孫悟空をにやけながら見ていてそれから、街道の奥まで消えていく。消えていくと悟空が後ろの方に振り向いて…。
「なんだぁ?あいつ?さっきからオラのことみて?」
悟空が不思議そうに呟いて
リィンが
「どうしたんだ?悟空?」
「いやなんでもねぇ。」
悟空がリィンに言って前を見て宿《風見亭》にて進み始めた。

―――――――――――――

宿屋《風見亭》。今回の実習にてA班が1日お世話になる場所である。昼前の時間は、店内には早めに昼食を食べに来る客の姿がいたりして、中には昼間なのにビールを飲んでいる客もいたりした。ちなみにビールを飲んでいる客とは、トールズ士官学校の教官。また《ＶＩＩ組》の担任である

サラ＝バレスタイン教官であった。

「ふはぁー!!仕事の後の一杯はやっぱり格別よね!!」

と言いながらグビグビとビールを飲んでいるサラ。その姿を見てるリィン達は呆れ

ていた。まぁサラ教官はこういう人間だからしょうがない…。それよりも問題があり…

「ガツ」

「悟空…いつまで食べてるつもりか？

リィンが聞いたら

「？　まがくいだでぃないばぁよばよ。」

「食べながら喋るでない…。」

ラウラもう既に呆れていた。

リィンとアリサとラウラとエリオットの気分はもう嫌だと思っていたのであった…。

その一連の出来事が終わったあとリィン達は泊まる部屋に荷物を置きに行くため部

屋に向かっていた。
そして中に入ると、ベットが五つあり…
「ちょっと!!どういうことよ!これ!?」
アリサが大声を出して叫んでいた。
無理もない。年頃の男の子、女の子と一緒の部屋で寝るのに抵抗あるのは当たり前だ。
だが…
「オラは別に同じ部屋でも構わねぇぞ!」
「あんた…何を言って…。」
アリサが口をパクパクしながらびっくりしていた。そしたら
「私も悟空と言う通り同じ部屋でも構わない。」
「ラウラまで…」

アリサがもう諦めたようだが
リィン達に向けて睨み始めて

「…不埒な真似をしたら許さないわよ。」

「あはは。しないってば…」
「右に同じく…」
「そんなに気にすることかぁ？」
男三人は答えてその後には
始めて実習に取り掛かるため下に降りた。

第8話

下に降りてきたリィン達は士官学院の紋章が描かれた封筒を渡された。
おそらく、特別実習についての内容だろうとリィン達は思った。
封筒を受け取ったリィン達はすぐに封筒の中身を確認をした。

特別実習　　1日目
実習内容は以下の通り

・東ケルディック街道の手配魔獣
・壊れた街道灯の交換
・薬の材料調達

上二つには赤い字で必須と横に書かれていた。
注意事項には「実習範囲はケルディック周辺２００セルジュまで」「１日ごとにまとめたレポートを提出すること」
と書かれていた。

「魔獣と戦うのかぁ。オラ早く戦ってみてぇぞ。」
「悟空は本当に戦うのが好きなんだな。」
「あぁ。戦うのはオラのシュミってやつだ!!ラウラは戦うのは好きなのか?」
「そなたほどの気持ちはないが…戦うのは好きなほうだ。」

「そうか!」
悟空がラウラと会話している時にリィンが
「そろそろ、与えられた課題をやるぞ。」
「そうだね。」
といいリィン達は風見亭から出て行った。

―――――――――――――

風見亭から出て行った後リィン達は実習を行っていた。
東ケルディックの街道の魔獣の討伐や街道灯の交換など

の課題を完遂していた。
完遂したのでリィン達は日が暮れる前に風見亭に戻ろうとしたら…。

「ふ…ざけんな！」
「それは…こっちの…台詞だ！」
サラに報告しようと風見亭に戻ろうとしたら、大市のほうで何やら揉めてる声がした。
急いで五人は、大市の方に向かったら身なりがいい商人と若い方の商人が揉めていた。
どうやら、２人は店の場所を巡ってのものらしい。
このままではまずいとリィンとラウラが羽交い絞めにした。
「事情はわかりませんが、落ち着いてください！」
「頭を冷やすがよい。」
リィン達に止められ、多少２人は冷静になれた。

身なりがいい商人は落ち着いたようだが
若い方の商人はまだ怒りが収まっていないようだった。
若い方の商人は子供が出てくるな！というが
リィン達が士官学院生と知った時にはさすがに若い方の商人は黙り始めた。

「…やれやれ、何やっておるんじゃ。」

リィン達の後ろから声が聞こえた。そこには
老人がいた。どうやら大市の元締めらしい。
元締めは商人達に話を聞き、一旦場を静めさせた。

元締めはどうやらＶＩＩ組のこと知っていたらしく
よかったら礼としてお茶でもどうだい？と聞かれたので
リィン達はそれに応える。

ーーーーーーーーーーーー

お茶を飲みながら会話していると、どうやら実習を依頼したのは元締めのようだった。

元締めとヴァンダンク学院長は旧知の仲だったらしく、それを知ったリィン達は驚いていた。

店の場所を巡った問題も、結局どちらとも本物の許可証であったため、週ごとに交替する形となった。

商人達は安心した様子であったが腑に落ちない部分もあったためにラウラが口を開いた。

「市の許可証というのは、本来は領主の名で発行されるものだろう。今回のこのような手違いはいささか腑に落ちないのだが…。」
「確かに…領内の商いの範囲は領主の義務の範囲だし…」

本来ならありえないミスを犯した領主の管理や領邦軍が姿を見せなかったこと。
リィン達は不信だと思い元締めに尋ねられたが…

「…まぁ、これはワシらの問題じゃ。お前さん達は実習に集中するべきじゃ。」

元締めの言葉にリィン達は不安な気持ちを抱きながら元締めの宅を後にした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

元締めの話が終わった後辺りが暗くなり、風見亭に戻った。
サラはB班の様子を見てきたため不在だが、
『せいぜい悩んで、何をするのか自分達自身で考えなさい』と書かれたメッセージあった。

「私の志望理由は単純だ。目標としている人物に近づくためといったところか。」

「目標としている人物？」

風見亭でご飯を食べ終わり、その後は五人で士官学院の志望理由を聞いていた。

「ふふ。それは誰だがこの場で控えておこう…。アリサの方はどうだ？」

「そうね…。…色々もあるんだけど、一番の理由は自立をしたかったのかな。実家とはうまくいかなかったところもあったし」

「うーん。その意味では僕は少数派なのかなぁ。元々、士官学院とは全然違う進路を希望していたんだよね。」

「確か…音楽系の進路だったか？」

「あはは…そこまで本気じゃなかったけどね…。リ、リィンは？」

「俺は…そうだな…〝自分〟を…見つけるためかもしれない…」

「え…」

「へぇ…」

「へぇ～そうなんか。」
「…」

アリサとエリオットは驚いた様子であり、悟空は興味深く頷き、ラウラは無言になっていた。
「いや、その…大層な話ではないんだ…あえて言葉にするならそんな感じで…。」

リィンは謙遜するが、エリオットにはカッコいいねと言われ、アリサにはロマンチストねと言われた。
色んな人に褒められたのか、リィンはちょっと照れていた。
「はは…悟空はどうして士官学院に…？」

「オラか？そうだなぁ～。面白そうだからかぁ？」
「はは…悟空らしいなぁ…。」
「そういえば、どうして悟空は旧校舎の地下にいたの？」
とエリオットが聞いてきたら。
「オラは、一星龍をぶっ倒して、その後、神龍の頭の上に乗って寝てたらいつの間にか、

いたんだ。」

「…ごめん。色々と分かんない…。」

「イ…イーシンロン？」

　エリオットとアリサが混乱していた。

「あぁ…一星龍は敵でよぉ。めっちゃ強いやつだったんだ。」

「へぇ…そうなんだ。」

「悟空よりか強いって…どんな敵なんだ…。」

「…ちなみに、神龍ってこの前言ってたドラゴンボールを揃えたら出てきて願いを叶える龍のことか？」

「あぁ。そうだぞ。」

「あれ…嘘かと思ってたよ。」

「でも、願いを叶えるって素敵ね。」

　アリサが答えてリィンが

「何やら悟空の話はすごいな…。何で…その神龍の頭の上に乗っていたんだ?」

リィンが悟空に聞くと。

「……まぁ色々とあってよぉ。」

悟空は何かを考えてからそう答えた。

リィン達は悟空が言ったことは嘘じゃないと思うが今でも信じられない話であった。

悟空は一体何者だろうか?どこから来たのか?色々と気になるばかりだけどリィンは…

「悟空…何かあったら俺たちでも頼ってくれ。俺たちは仲間なんだから。」

「おう!!ありがとな!」

悟空はにこやかに答えたのであった。

第9話

実習二日目朝

「ラウラ。昨日は済まなかった」

身支度を整えてから一階に降りて朝食をとった後、特別実習の封筒を受け取った。

必須の依頼はなく、早めに終わらせて風見亭で夕飯を食べてからトリスタに帰ろう。

そう話がまとまったところで実習に出かけようとしたところにリィンが発した言葉が冒頭の台詞である。

「そなた自身の問題ゆえ、私に謝る必要はないと言ったはずだが・・・？」

「いや、そうじゃない。謝ったのは、”剣の道”を軽んじる言葉を言ったことだ」

「・・・そなた、”剣の道”は好きか？」

「・・・好きとか嫌いとかもうそういった感じじゃないな、あるのが当たり前で・・・自

分の一部みたいなものだ」

リインがそう言った後ラウラが笑顔を見せ

「ならばよい。・・・・私も同じだ。」

「ラウラ・・・」

「えへへ。よくわからないけど、仲良く出来たみたいだね。」

エリオットが入ってきて。

「別に仲違いをしていたわけじゃないんだが・・・」

「まあ、そうだな」

「まったく、2人だけで分かった顔しちゃって。これじゃあどう仲直りさせようか悩んでたこっちが――」

墓穴をほったのかアリサは段々顔が赤くなり、

周りのメンバーはアリサに向けて目線を集中していた。

「ふふ・・どうやら色々と心配かけたみたいだな。」
　とラウラが言って
「ああもう、私のことはどうだっていいでしょう！」
「あはは・・・」
「昨日、リィンとラウラ、ケンカしてたのかぁ？」
　と悟空が聞いてきて。
「そういえば、悟空すぐに寝ちゃったもんね。」
　エリオットが言って。
「まっ。仲直りできてぇよかったじゃねぇか。」
「そうだね。」
　そういったあとに風見亭の娘が急いで入ってきて
　女将に向かって・・・
「女将さん、大変大変！大市の方で事件ですよ！」

大市の入り口に差し掛かると、怒鳴り声が聞こえてくる。
見てみると昨日ケンカしていた人と同じであった。

「よくも私の屋台を滅茶苦茶にしてくれたな、この卑しい田舎者め!!うせ君がやったんだろう!?白状したまえ!!」
「んだと、帝都の成金が!そっちこそ俺の場所を独り占めしようとしたんだろ!?」

２人のケンカは止まることなく、殴り合いになってしまいそうなところでリインとラウラが止めに入った。。
また横槍を入れられて辟易としている様子だが、すぐに口論を再開し、彼らはお互いに掴みかかった。
「――そこまでだ」

このままでは本当に流血沙汰になりかねない、そう思ったときに背後から声がした。
振り返るて見てみると、そこには昨日遭遇した領邦軍がいた。
領邦軍隊長はすぐに元締めにこの騒ぎの原因を説明させ、状況を把握した後、２人を引っ立てろなどと理不尽なことを言いのけた。
いがみあう2人の商人が同時に起こした事件、というのが領邦軍隊長の見解らしい。
「捜査もしないうちから、強引過ぎるのではないか？」
「フン、領邦軍にはこんな小事に手間を割く余裕などないのだよ」
「(そ、それって・・・なかったことにしろってこと!?)」
「(そうみたいだな・・・)」
リインとアリサは二人で領邦軍に聞こえないように話していてた。
そして、終わったのか領邦軍はその場から立ち去った。

「何とか騒ぎは収まったけど・・・」
「こ、こんなの滅茶苦茶だよ!?」
「あれが領邦軍のやり方というわけか」
アリサ、エリオット、ラウラは堪えきれずに言葉をこぼし、悟空はちょっと考えた顔をしていた。
取り敢えず、考える前に壊れたテントを片付けなければならないので
リィン達は片付けるのを手伝った。
その後大市は無事に開かれることとなり、リィン達は元締めの家で話をして元締めからお礼を言われたりしていた。
さっきから何かを考え込んでいたリィンが口を開いた。
「・・・お願いがあります。今回の事件――俺たちに調べさせてもらえませんか?」
リィンが言った後、皆驚き
「ええっ!?」
「屋台を壊した犯人を見つけるということか?」
元締めは自分達の問題だから気にするな、と一度は拒否するが、士官学院の生徒である自分達が理不尽を見逃すことは出来ない、とリィンは主張する。

「『せいぜい悩んで、何をすべきか自分たち自身で考えてみなさい』・・・サラ教官はそう言っていた。だったら・・・今がその時じゃないか？」

その後皆一斉に考え始めた。

悟空はもう決まっている顔をしていた。

「オラは賛成するぞ。困っている人を見過ごせねぇ。」

「・・・・・・なるほど。確かにこれも特別実習のうち、なのかもしれないわね」

「ちょっと不安だけど・・・僕達だけでやるしかない、よね」

「義を見てせざるは勇無きなり・・・か」

犯人探しなんて初めてやることだから少し戸惑っていたが困っている人を見過ごせない。そんな悟空の言葉を聞いてアリサ達もリィンに賛同した。

その様子を見つめていた元締めは、事件の調査を任せることに決めた。

「ウ～イ・・・酒だ、酒持ってこぉい～・・・」

「さ、酒くさっ!!」

「え、ええとよかったら・・・家まで送りましょうか?」

リィンが酔っ払いに聞いたら

「うるっせえなあ・・・おじさんのこたぁ、ほっといてくれよぉ・・・いきなりクビにされちまうような、こんなロクデナシはよぉ～・・・・・・。自然公園の管理は、俺の生

きがいだったのによぉ～・・・」
「自然公園って・・・《ルナリア自然公園》のことですか？」

リィンたちが実習の途中に寄ってみようかと思えば、立ち入り禁止の看板があったため入らなかった場所であった。
「おお～、嬢ちゃん知ってんのかぁ～？おじさんはなぁ、そこの管理員をしてたのだぁ～・・・」
「貴方が管理員を・・・なら、どうしてクビになったんですか？」
「ううっ・・・それがさぁ、いきなりクロイツェン州の役人サンがきてさぁ・・・解雇されちゃったんだ～よぉ・・・おじさんはさぁ、ものすご～くがんばって仕事してたのにさぁ・・・」

更に話を聞いていると、この酔っ払いは、昨日の夜に現在のルナリア自然公園の管理員たちが西口から出て行くのを見かけたらしい。
それも、いろいろな物を抱えて。
自然公園なら潜伏場所としても盗品を隠す場所にしても最適かもしれない。
入り口に立っていた男達は見張りだとすると、あの妙な態度も納得がいく。

リィン達はますます怪しいと感じ、その顔をみた酔っぱらいは

「なになに、おじさんが役に立っちゃったのかぁ～？お礼なら、酒を一杯おごってくれてもいいんだぜぇ～？」

「御仁、今のうちに酒を抜くがいい。場合によってはそなたの場所を取り戻せてやれるかもしれん。」

「はぁ・・？」

酔っぱらいは不思議な顔をしていた。それぞれが集めてきた情報も報告しあい、潜伏場所はルナリア自然公園だろうと全員が確信したところで、リィン達はルナリア自然公園に向かった。

ルナリア自然公園の入り口は鉄格子と南京錠で閉ざされていて、管理員だという男達の姿は無かった。
ラウラが鉄格子ごと壊そうとしていたがリィンがやるといい・・・
リィンは刀を構え、八葉一刀流。四ノ型《紅葉切り》をして南京錠を真っ二つにした。
そして、鉄格子が開きルナリア自然公園の中に入った。

「――やれやれ。口ほどにもない連中だ」
自然公園の最奥で、犯人らしき4人の男たちと盗品が入れられた大量の木箱を見つけた。
突然現れた学生達に驚き、銃を構え攻撃を仕掛けてくる窃盗犯たちにすぐさま応戦する。
窃盗犯たちの無力化に、時間はそれほどかからなかった。

「勝負はあった。投降して、大市の人たちにきちんと謝罪してもらうぞ？」
「そちらの盗難品も全て回収するわ」
「誰に頼まれたかも話してもらいましょうか？」

往生際悪く、負けを認めず口を割ろうとしない窃盗犯たちを拘束しようとしたその時。
「エリオット？」
「どうしたの？」
「う、うん・・・何だか笛のような音が聞こえた気が――っ!?」
大型魔獣のものらしい咆哮が聞こえてきた。
直後、地響きを立てながらこちらへ近付いてくる。
そして出てきたのは巨大なヒヒであった。
「この自然公園のヌシといったところか・・・！どうする、リィン!?」
「くっ・・・さすがに彼らを放り出すわけにもいかない！みんな、何とか撃退するぞ！」
「承知・・・！」
「わ、分かったわ・・・！」
「女神様・・・どうかご加護を・・・！」

「でっけぇ・・ヒヒだなぁ。」
「悟空・・・関心してる場合ではないぞ。」
「おう!!　さてやるかぁ。」
悟空も構え始めて
ヒヒ・・・・グルノージャは再び咆哮をあげて襲い掛かってきた。

グルノージャだけではなくゴーディオッサー二体も出てきた。
アリサが弓を構えて
「フランベルジュ!」
炎を纏った矢がゴーディオッサーニに放たれる。
最初こそビクともしていなかったが、何度もアーツを喰らい弱っていたゴーディオッサーはついに体勢を崩した。

そして、悟空が隙をついて、ゴーディオッサーの腹に拳を入れた。
動きが止まって、ゴーディオッサーはゆっくりと地面に倒れた。
「はぁ・・これで・・・二体目。悟空ナイスパンチ。」
「おうありがとよ。アリサも良かったぜ。」
まだ悟空はピンピンしていて、アリサは悟空の姿をみて驚いたがまだグルノージャがいるので驚いている暇はなかった。

前方の方でリィンとラウラがグルノージャと戦っており
エリオットは二人のサポートをしていたが
やはり三人だけあまり余裕そうではなかった。
悟空とアリサはすぐにリィン達のところに戻り・・・

「奥義・洸刃乱舞!!」
光を纏う剣がグルノージャに斬りかかるラウラの姿
しかしグルノージャは最後の回転斬りをくらい、一瞬のけぞったがすぐに体勢を立て直した。

「くっ・・・」
一瞬ラウラの動きが止まる。
グルノージャは拳を振り上げラウラへ迫る。
「ラウラ!!」
ラウラは攻撃をくらうと思い覚悟をしていた・・
攻撃を当たると思いきや・・・グルノージャの大きな拳を片手だけで受け止めていた悟空の姿があった。
「ラウラ、諦めてるじゃねえ。」
「・・・・ああ。すまない・・・悟空。」
「オメェはまだこんなところでくたばる奴じゃねえ。オラがこいつの拳を掴んでいるからその隙にオメェらでやっつけろ。」
よく見ているとグルノージャの大きな拳を悟空は片手で掴んでいた。そのせいかグルノージャは拳を引き抜けない。
本来なら驚くが驚くよりもグルノージャを倒すことを頭に入っていた。
その後にリィンが刀を構えなおして。
「焔よ・・・我が剣に集え」
開眼すると同時に、凄まじいスピードでグルノージャへ近づく。

「はあああああっ！――斬っ!!」
リィンの剣が焔を纏い、一気に振り下ろされた。
そしてグルノージャは地面へと倒れていった。

「はあっはあっ・・」
「と、とんでもなかったわね・・・」
「さすがに、もうだめかと思ったよ・・・」
「オメェらよくやったな。」
悟空は元気そうに言った。
「悟空は元気そうだな・・・。」
「悟空のおかげで助かったよ。」
「いや、オメェらのおかげでやっつけてんだ。」
「そうだな・・・。この勝利――俺たちA班全員の”成果”だ」
その言葉に思わず笑みがこぼれ、全員が顔を見合わした。

「・・・と、とんでもねぇ・・・」

「”あの野郎”話が違うじゃねえか・・・」
”あの野郎”と聞いたリィンが反応して
「”あの野郎”?」
その時にピー!と笛の音が聞こえた。
「・・面倒な者たちが駆けつけてきたようだな。」
笛のなった方向を見ると領邦軍が銃を構えて走ってきた。
そして領邦軍はリィン達を囲み始めた。
「取り囲む相手を間違えているのではないか?」
ラウラは領邦軍に対し鋭い眼差しを向けていた。
しかし、兵士は聞く耳持たずといった様子で、それを見た窃盗犯達が勝ち誇ったような表情を見せた。
「か、完全にグルじゃないか・・・」
「・・・呆れ果てたわね」
エリオットとアリサの声色には、先ほどまでの戦闘での疲れと共に領邦軍への呆れが含まれていた。

領邦軍隊長は後ろでへたり込んでいる男達だけではなく、リィン達が窃盗犯の可能性だってあると言ってのけた。
「・・・そこまで我らを愚弄するか」
「本気でそんな事がまかり通るとでも・・・？」
「弁えろと言っている。ここは公爵家が治めるクロイツェン州の領内だ。これ以上、学生ごときに引っ掻き回されるわけにはいかんのでな」
領邦軍隊長が言った瞬間、領邦軍隊長以外いた兵士たちがいつの間に倒れていて気絶していた。
そして、領邦軍隊長の目の前にいたのが悟空であった。
「な、なんだお前は・・いつの間に兵士たちを・・」
領邦軍隊長は何が起きたのがさっぱりわからなかった。同じくリィンたちも何が起きたのはわからなかった。
「こいつらはオラが寝かせといた。オメェがその気であればオラも容赦しねぇぞ。」
「小僧が・・・戯言を・・・」

「――そこまでです」

と、涼しげな声が届く。
４人の軍人が駆け寄ってきて、その後ろから水色の髪の女性が現れた。
「（間違いない・・・！《鉄道憲兵隊（Ｔ・Ｍ・Ｐ）》だ！）」
軍人たちの正体は、帝国正規軍の中でも最新鋭と言われている鉄道憲兵隊だと気付いた。
その後、水色の髪の女性と領邦軍隊長話し合い、リィン達が犯人である可能性はありえないとなり、領邦軍隊長は撤退命令をだそうとするが兵士全員気絶しているので困っていた。
そしたら悟空が兵士全員を起こし始めた。
兵士全員起きたら領邦軍隊長は撤退命令を下した。
窃盗犯達は話が違う、と焦りの声を漏らすが領邦軍がこれ以上彼らを庇い立てすることはなく、鉄道憲兵隊に拘束された。
「ふふ、お疲れ様でした。――帝国軍・鉄道憲兵隊所属、クレア・リーヴェルト大尉です。トールズ士官学院の方々ですね？調書を取りたいので、少々お付き合い願えませんか

？」

事情聴取を終えたリィン達が元締めとクレアと共に駅舎の前で立ち話をしていると、B班のいるパルム市に行っていたはずのサラが現れた。

クレアと何やら思わせぶりな会話をしていたが、詳しく教えるつもりはないようで、関係について尋ねてもはぐらかされる。

そして、ケルディックの駅へ入っていくクレアを見送り、リィン達もまた、元締めに見送られながらトリスタへ向かう列車へ乗り、ケルディックを後にした。

「また寝てるし・・・」
「B班の方が散々だったみたいからな。そちらをフォローしつつ、1日でこっちに戻ってきたら疲れて当然かもしれない」
「なるほど・・・お疲れ様だったみたいね」
リィンとアリサとラウラ、悟空とエリオットが向かい合うようにボックス席に座っており、サラは1人、通路を挟んだ隣のボックス席に座っている。
リィン達は完全に眠っているらしいサラを横目に、起こさないように若干抑えた声で話していた。

それから、特別実習の目的についての話に変わる。
リィン達が各々意見を出し合っていると、途中で起きたサラが混ざってきた。

「君たちの指摘どおり、現地の生の情報を知っておくことは軍の士官にとっても非常に有益よ。そして、いざ問題が起こった時に命令がなくても動ける判断力と決断力、問題解決能力――。そうしたものを養わせるために《特別実習》は計画されているわ」
「やっぱりそうなんですか・・・。」

「うーん。士官学院にしては画期的なカリキュラムというか。」
「ふむ、それで半分ということは残りはどういう狙いなのか・・」
エリオットやアリサ、ラウラは納得した様子になる。
しかし、リィンは何か考え込んでいるようで、サラがどうしたのかと尋ねると、少し遅れて口を開いた。
「・・・そういった理念や実習内容を改めて考えると、それってなんだか《遊撃士》に似ていませんか?」

「・・・!」

リィンがそう言うと、サラは目を見開き、アリサ達はサラを見る。
「てへ――バレたか。ぐー、ぐー。すぴー、スヤスヤ・・・」

サラはわざとらしくいびきをたてて狸寝入りをはじめた。
そしてリィンは何かを考え始めて・・・
「あら・・?」
「えっと、まだ何か気になることなるの?」

アリサとエリオットが気になった様子で聞くと
「いや、そうじゃないんだ。・・・入学して《Ⅶ組》に入って一月がたって・・・考えれば、みんなにはずっと不義理をしていたと思ってさ」
困ったような、触れるなと懇願するような表情に、リィンは慌てて否定し、話を切り替える。
「――俺の”身分”について、話がしたいんだ」
「もしかして、貴方の家って・・・」
「ああ、マキアスの問いにははぐらかす形で答えたけど・・・俺の身分は一応《貴族》になる」

帝国北部の山岳地《ユミル》の領主《シュバルツァー男爵家》。
当主が山で拾った子供を養子として迎え入れた、という話は一時期、貴族の間で格好の噂の的になった。
噂の内容は、どれも聞いて気分のよくなるものではなかったが。
「あなたも色々と事情があるみたいね・・。」
「みんなには黙っていられなくなったんだ。共に今回の試練を潜り抜けた仲間として・・・。これからも同じ時を過ごす、《Ⅶ組》のメンバーとして」

「リィン・・・」
「同じ時を過ごす仲間か・・・」
「・・・まったく。生真面目すぎる性格ね。その話、帰ったら他の人にもちゃんと伝えなさいよ?」
エリオットとラウラがまず反応し、続いて反応したアリサの声はとても優しいものだった。
「ああ――そのつもりさ」

その時話をきいていた悟空は

「(仲間か・・・あいつら今頃なにしてるんかなぁ?)」
ずっと考えていた顔をしていた。
悟空は昔の仲間と会いたいと思っているが・・・もう二度と会えない・・・
だけど今は新しくできた仲間がいる。
これから新しくできた仲間と進んでいくことを決めていた。